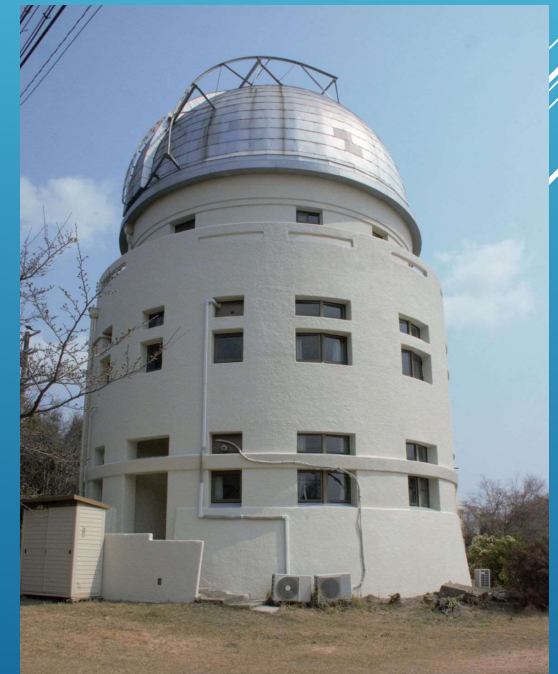


本館は鉄筋コンクリート造でいわゆる壁構造の手法を採用する。
直方体へ形態を抽象化する例は比較的多いが、円筒形は稀少であり、その点でも貴重である。



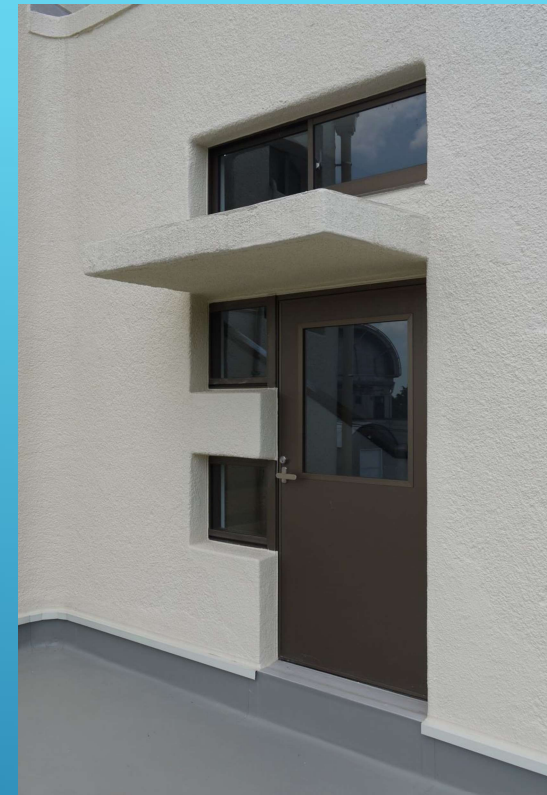
横長の長方形をなす窓と手摺りの開口の意匠

各部分が連続し、一体化していて、建築全体が単純な幾何学形態を呈するように構成されている。



横長の長方形をなす窓
と手摺りの開口の意匠

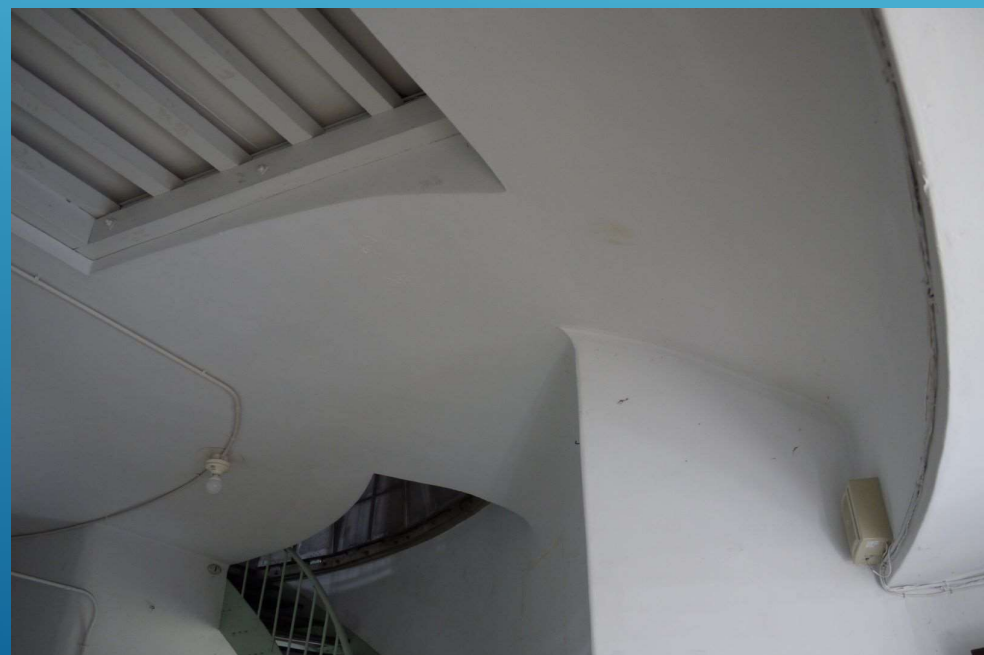


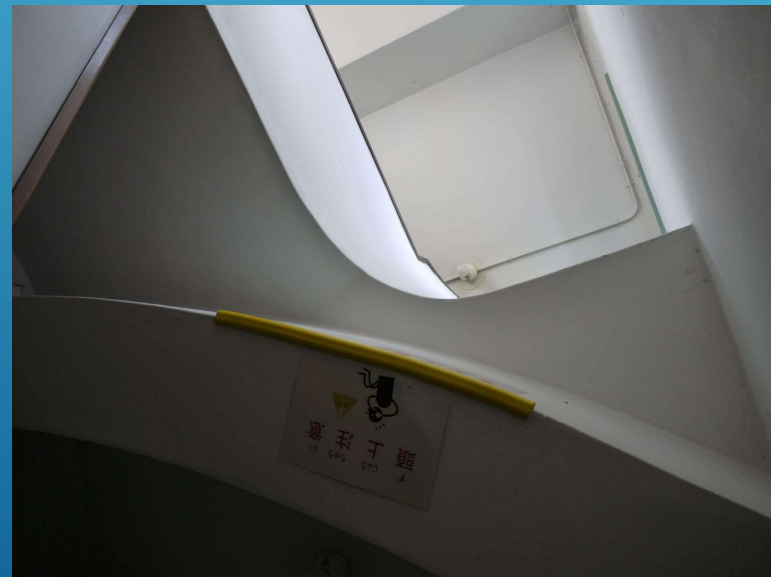


出入口に見られる、開口をまたぐように
庇を付ける手法も斬新である。



本館2階のマッシュルーム構造の天井





階段と天井



ドーム骨組みは鉄骨トラスで構成し、亜鉛板を葺く。



3 階ドームと45cm屈折望遠鏡

各部分が連続し、一体化していて、建築全体が単純な幾何学形態を呈するように構成されている。



出入口に見られる、開口をまたぐように底を付ける手法も斬新である。



別館出入口前の台形の障壁

各部分が連続し、一体化していて、建築全体が単純な幾何学形態を呈するように構成されている。

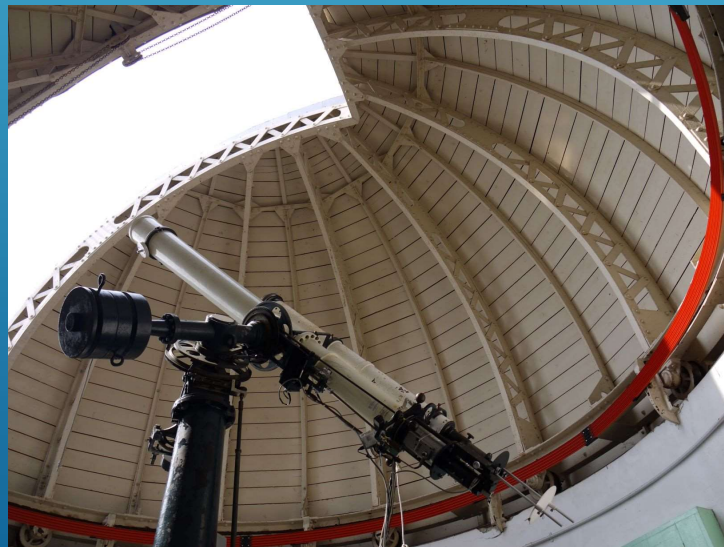


出入口前の台形の障壁





1 階階段



ドーム骨組みは鉄骨トラスで構成し、亜鉛板を葺く。



2 階ドームとSartorius屈折望遠鏡

子午儀室は亜鉛引き鉄板の瓦棒葺きによる屋根を極度の緩勾配にした手法が注目される。これは、同室の形態を、円形の本館・別件と対比をなすように、直方体へ還元することを目指したためとみられる。

